



近世悦美少年録  
八編  
三

~ 13  
3567  
38



門 13  
號 3567  
卷 38

新局玉石童子訓卷之二十三

東都 曲亭主人授編次



第五十三回

李彦胤忠東西不履歷を

範的奸惡擬二郎を寛を

登時韓錦の間貫佐用二郎の松煙齋と問答の語次不他の已が亡父親佐  
用六故世の故朋輩を多と慈ふてゆき知り疑の露のまぎ雲齊ねと思ふも  
膝を找めり先生何とらるや貴老の我先大人の故朋輩を多と我身賢  
歳より比二親の夜話不然者ありと傳へて肥後の菊地家の一忠臣防守筑四  
郎李彦胤忠の故まる果おあつるやと訝り問はまそ然りと我身和殿の父大人  
と俱小舊里不世と憐る其比和殿弟兄の尚幼小なり今に迷ふ面三心れては  
ねが知るよりも一旦怨と結びよ和睦の今料らるも言の茲不及は是

早稲田 大學 図書館  
昭 34.6.3 庚  
藏 書

昔縁の盡き所素懐と遂る不似されども故世王世不在は故りや  
 人切ての心遣り我年来の宿念と和殿小告まき思へども憚りの閑壁耳  
 あらうとと佐用二郎少あき其美るる配慮の要る我一家児る弟佐七  
 作と女弟の角能の弟子奈我四時八々今尚南偏あるげれども他等も都腹心  
 ろう洩せとそのけけらあはれいとくと請回へ松煙齋の丸四郎四下と見交る聲と  
 低めて然らば意衷と盡と一と言言くとも少ぬ在昔南朝の残燼るけは我  
 昔君菊池肥後太郎武俊朝臣武勇々父祖小弥増たる孤忠義烈のまろ  
 のく興復の夙望已時る肥後の阿蘇山の敗城小義旗と揚あひか當時足  
 利家より討隊の頭人防長豊元丸數洲の守大内左京權大夫義貞王數萬  
 騎小將とくくち向ふとせえとら躬方素素より小勢を外小援の兵るけれ敵の  
 猛威小恥怯しく落もく者のまろける然らばとあれ武俊主の勝負と未然小

量りしと一箇の躬方と敷せとて右一夜風雨の暗に紛れて主卒と共小  
 城と棄て任方も知らざるのへ寄隊へも濡さして全勝の利を認め不似と  
 こと然れはとせざる功るけれ義貞怒と移ま小け人の諫と聴きと彼阿蘇沼の  
 蛇虎と燔て然る凱陣あけける此是永正六年己巳の春二月のゆふ多て二十  
 餘年の昔ふるぬそれよりとせはのく乱れて京師へ戦馬小荒るまも東西の海風  
 波濤に困民安らざる開が中武俊君の夫人をとりまける小芳宜の方とゆえ  
 まで阿蘇の山里小滞せまるとて給事ある者ハ我丸四郎季彦夫婦と和殿の  
 二親只是の俱小馬と飼薪を樵或ハ潮と汲と貝と拾ひて辛は得世と不樂あ  
 り小芳宜の方小仕まると武俊主の御往方を悄悄地小索まられと生死得世と  
 知るよりもろ只真愛るける光陰のまると早く十稔と麻糸ける永正十五年の秋の  
 時候和殿の父大人故世更有一日咱参ふ譚まらる屬日人の噂小はるは昔君

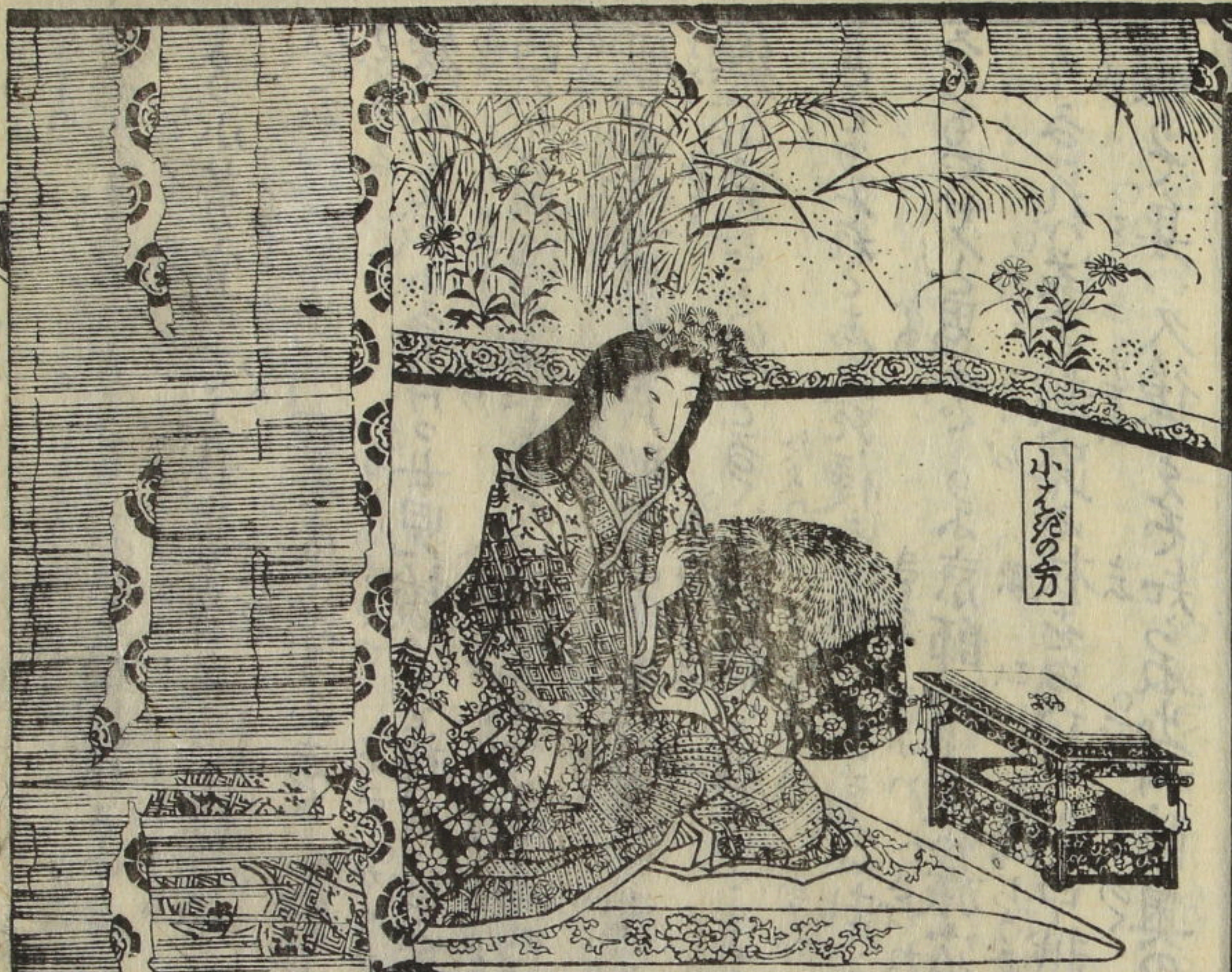
太郎武俊君の阿蘇山落城の初より東國の方へ世を避めて近曾身故  
 てのひともやえ或は猶存命てどうもまきといふ。虚實詳るる後どの信里あり  
 額どうち合徒物と思ふより。咱ち宅眷と推して京浪速のゆゑの心を  
 巡歴して我君の御所在と素なすらばやと思ふ。然れれば和殿夫婦のまゝ小若官の  
 方へ給事まゝ衣食其餘の東西まゝも。調達まゝらるゝといふ。大受るべきは光  
 陰不関守あるまれば。壯年の今思ひたゞ氣力と俱脚腰衰ゆる老後不  
 至る千里の逆路と欲まるといふ。あて克せんや。まの毛と何と思ひあつと問れて已  
 答るまゝ。住るも忠美の外。和殿は遠くよの地と去て彼山所在と素糸なる  
 自ら夫婦の留りて夫人の仕へまゝ見えたる。如く便宜ならぬ。但老少不定。命の  
 長短料りがさう。一たび袂と分りよ。送本意と迷むと。後れ先だる露露命の  
 他郷に終るとあら。兒子も幼少。親の契り。其人を知らざれば。知らざるのせば。

作者曰下  
 源高葉  
 集松浦佐  
 用媛云の  
 古歌の類  
 公孫龍局  
 編の用  
 ぬの時上五  
 文字の  
 筑志四五  
 とを實は是  
 暗記の太  
 今も古歌  
 とを實は是  
 びて因は  
 改正を香  
 官足を思  
 乙狐か

忠心義膽埋れて子孫の世に知らるべし。俱に紀を貽さん。彼といふ故世王感  
 佩して其美是の介る。紀の跡に優る者。和殿の素より能書へ何れ一  
 筆貽しぬと乞れて辭へなわらね。躬て其意を任る。短冊一枚より出づ墨  
 摺流し筆と添て。遠く入松浦佐用媛都麻恋の領巾麻毛り。よる負へ山は名  
 と萬葉集ふる古歌と写し。その短冊と函箇を裁て上の方と佐用六更に授け  
 下の方と我懐に斂めて且ら。今よりの後年と麻正ても再會の時と。今  
 日の契りを兒孫に告げて各々の短冊半分を授けて當時の照据ふさ。和殿  
 の家子佐用二腋子の稍東西と知る童蒙。况我獨なる校を。純く五歳ふる  
 てぬ憑心。からの者るれも幸ひ。共侶の本性尚古の志あり。後の禪益あり。も  
 やせんといふ。佐用六更。諾感と。然らば亦所望あり。我家子佐用二郎と和殿の令  
 愛。拔る童女と。目今親の心にて結髪。夫婦に做さる。年久く逢ふ。

親の契りを忘れむと。送所所在と尋索りて。後竟小妹と夫の縁と結ぶと。や  
 ありきの多誰何と談せらる。是は是とちて頭と掉りて合る。開も由るはあね  
 ども我思ふ多い。介らむ男女送小稚は。結髪衣の夫婦と。富貴舊家。よ小そ  
 あはれ和殿と我。日花の花。見子も一所不任る。今婚姻と定るとも。生涯  
 環會もあはれ。俱小徒小節義と守りて。娶らむ嫁らむある。縦年園て環  
 會日ありとも。約莫男女の情縁。稚は時と同。かむ。送小成人る。及びて  
 外小増。仕仕ある。不至る。俱小厭。思ふ。然る時。親とも。然る其害あり。其  
 利なり。是は因てこれと思へ。婚姻の。の。議さ。と。佐用六。更再。議。及  
 び。の。趣。皆。理。あり。然。然。自然。不。任。せ。と。密。談。既。不。果。か。當。晚。佐。用  
 六。更。の。夫婦。小。芳。宜。の。方。の。御。前。小。あり。て。主。君。の。御。所。在。と。未。系。ま。く。欲。え。ぬ。る。  
 臆念と告稟して身の暇を乞はる。か。小。芳。宜。の。方。へ。禁。め。る。と。餘。波。と。惜

まきあふの。是。時。ま。でも。猶。些。の。御。貯。禄。あ。り。れ。ば。則。餞。別。ふ。と。黄。白。錢。枚  
 欵。賜。り。て。彼。身。の。暇。を。合。ら。せ。む。佐。用。六。更。の。拜。謝。と。逆。路。の。准。備。も。密  
 密。其。年。の。八。月。下。旬。小。宅。春。と。送。り。携。て。東。を。投。て。立。去。り。ける。是。よ。りの。後  
 彼。君。小。仕。へ。ある。者。と。我。們。夫。婦。の。ま。れ。ば。艱。苦。八。入。小。弥。増。て。心。細。く。も。あり。程  
 小。芳。宜。の。方。の。年。來。の。御。煩。襟。蘊。り。と。や。あ。の。次。の。年。は。春。の。時。候。より。長。病。病。所。小  
 臥。の。て。鍼。灸。藥。餌。の。驗。も。竟。小。神。去。り。あ。い。か。我。們。夫。婦。の。哀。悼。悲。泣。の。亦  
 多。う。も。あ。ら。む。か。却。あ。は。れ。あ。ら。む。され。御。亡。骸。の。潛。や。う。程。遠。く。山。院。に。埋。葬。さ。る。  
 ま。ご。も。世。の。憚。の。言。れ。れ。只。の。御。墓。表。の。望。夫。石。の。三。言。を。勒。と。菩提。と。吊。ひ。な。る。  
 程。小。幸。る。と。の。ま。ち。續。て。我。妻。音。矢。の。年。の。冬。時。病。の。瘡。聚。身。小。迫。り。て  
 黄。る。泉。小。歸。り。か。命。難。面。に。我。身。の。春。の。雁。の。對。と。喪。孤。孫。の。枝。小。離  
 ま。異。ら。む。松。の。標。も。甲。斐。る。死。ま。小。只。吳。竹。の。世。と。不。樂。て。慰。る。者。と。小。稚。は



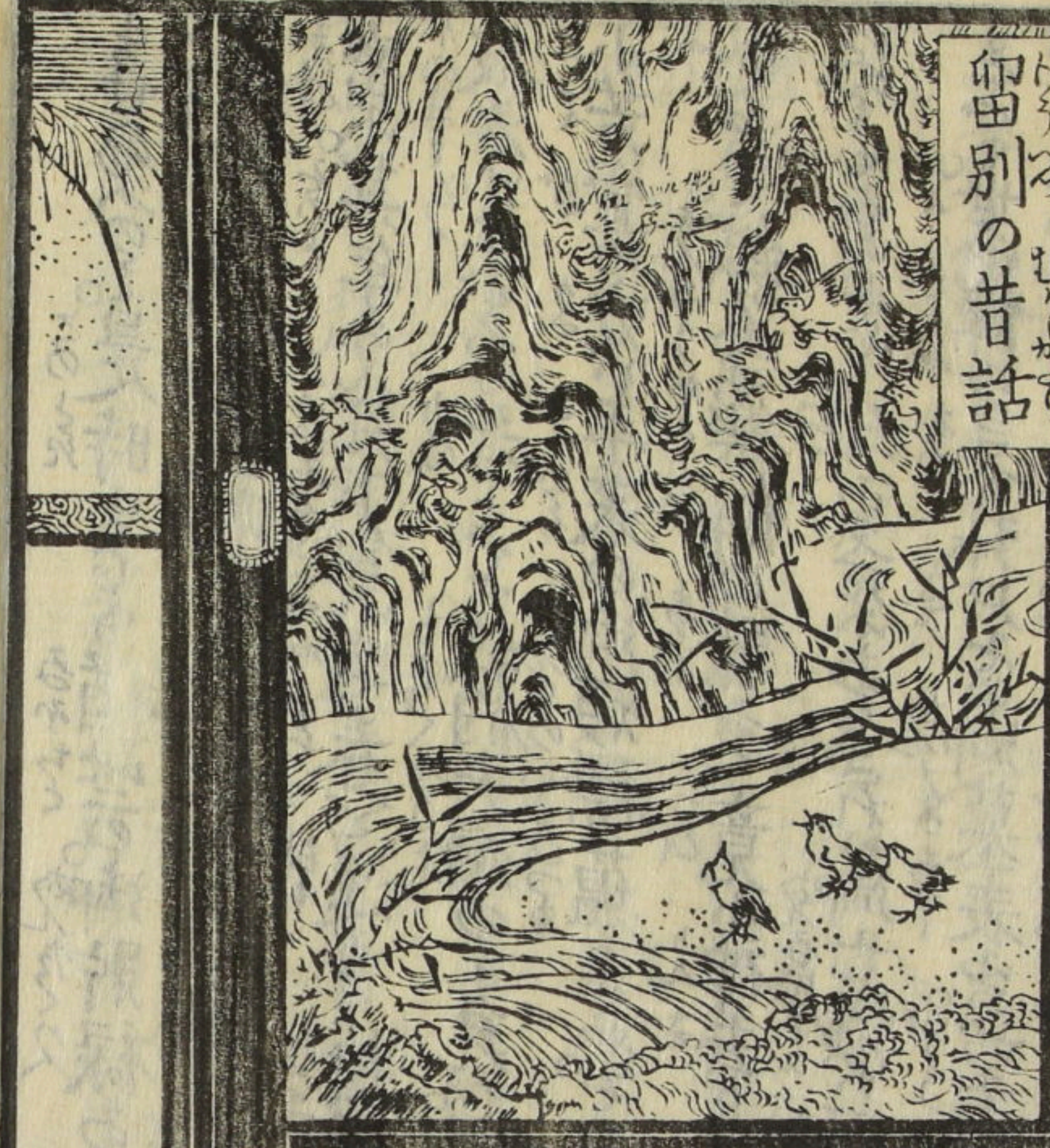
小太郎の方



孫四郎

おとや

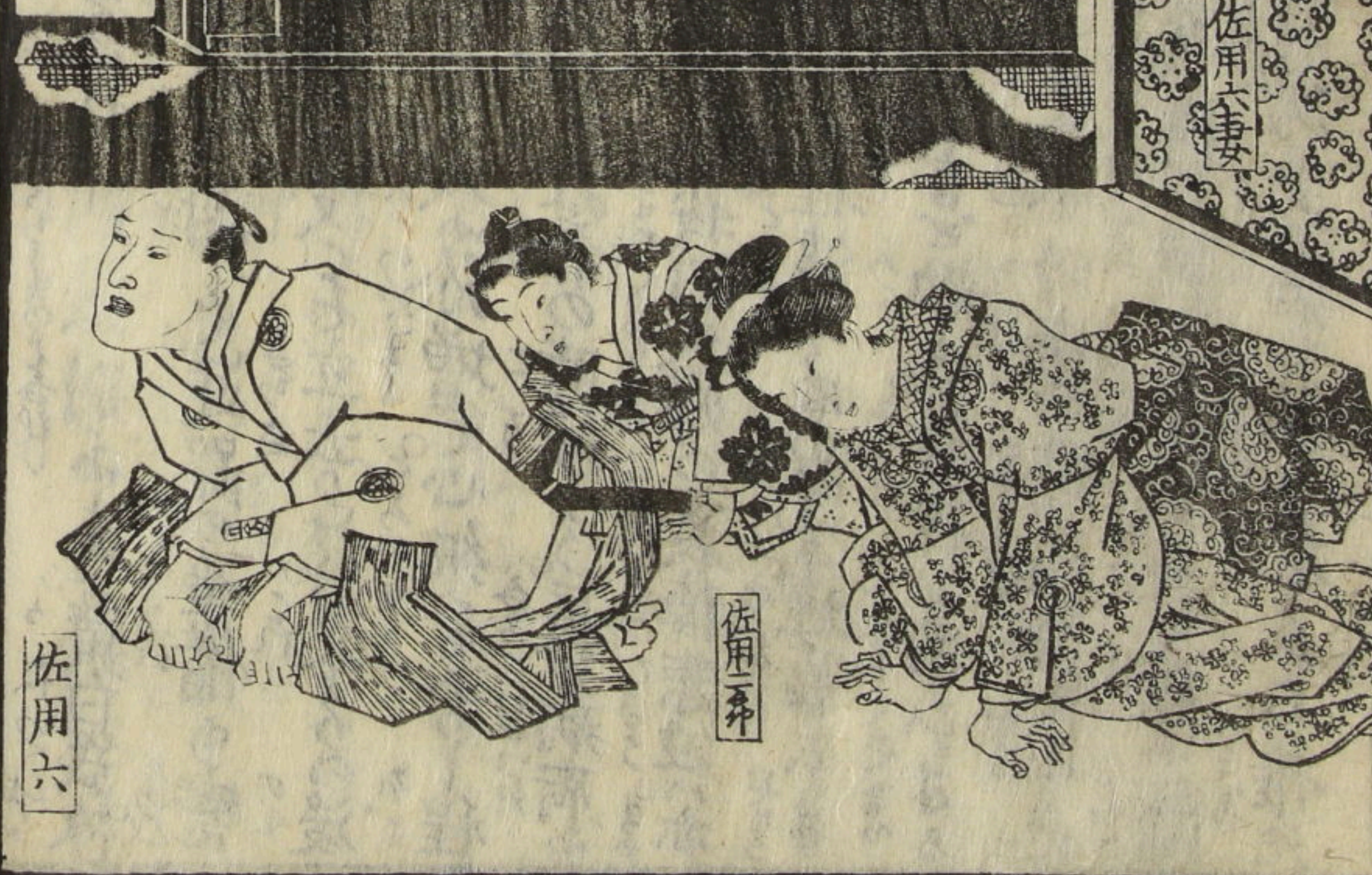
五



舊夫人小謁  
して防守  
間貫東西  
留別の昔話



佐用六妻



佐用六

佐用三

五石立子記巻三

大徳寺

女見のまゐるれば左さま右さま思惟る今仕る君もろく茲ぞ艱苦を凌ん  
 たり。小方宜の方と我妻音矢の小祥忌を果し我も回貫佐用六の志小效  
 ひて我君の御所在を索巡る小あくとあらど。竟小深念を定めかゝる當年  
 終小七歳ふるりける。女見抜小と推方て啓約ある時佐用六更と六路を日先  
 西の九固園を送もる。徧歴ある。南海四園小杖と曳小日と重年と思ふこと  
 厭り。這里小二月那里小半年。我書と需る人の為小逗留とそ潤筆を盤  
 纏小元とととと。二四稔と歴ゆるまで欲する所我君の御所在と涉獵  
 とも。それとある。便る所更小東小赴て佐用六更小環も會り商量敵小  
 ろもやせんと思ふ。小京師浪速小旅宿者も他も亦何處小在るや知る  
 するれば遂小越路小杖を曳て。越中越後小あつらへ加賀能登佐渡會推  
 渡りて身の久後のを知らぬ。羽陸奥の盡處までも漏を隈る長旅受

四五稔と歴ゆる程小女見抜小八年。爾て既小二八ふる。隨小教されど縫  
 刺の技草書目も抄る。書讀むと久好。然逗留の程人小借り源氏  
 宇津保竹採る。假字文章小あろ。然り。本性る。第一  
 親小孝順也。容止も亦醜。里每小取女ら。欲するもあり。我小  
 親小美引。或の亦逆路也。護麻の灰人肉脛紀を呼做されて他郷より來ぬ  
 る婦女子と勾引ゆる。盗見あれ。守るもの勤小ある。然ら。西騎旅の鳥見  
 のある。姥捨山の月る。只抜小の慰めら。去歳より信濃の山里小在り  
 今茲上毛武藏より常陸下總安房上總まで尚我君の御隱宅と素は。ら  
 まく思ひ。二月の時候小那里と去り。料ら。白猪の驛路と過る。その日小  
 時病發りて逗留程和殿の為小抜。媒妁せられ。送小然と結び。果  
 和睦の今に至り。俱小素生と解諦。其。豈憶小和殿。是昔契り。我故

明輩同貫佐用六故世更の家子佐用二であらふ其三親の世ふまを我本意を  
 多小似えと親小優を兄弟兄の名告逢一の尚馮心もあく歎ひふて七とい過業  
 の長談脩話韓錦の佐用二郎の胸と誤り且蓋て顔の汗と拭いぬる被然る  
 頭と拾は嗟嘆堪堪と谷る中思ひたや防守先生貴老の忠義の我亡父十倍志  
 たる憂苦艱難今もゆかぬ我身と送置殺せられん抑我親佐用六故世を  
 昔年肥後と辭去りて京小一稔浪速小一稔僑居て舊君の所在と未承りし  
 毫も便とぬる一然らば東園赴人を猶亦宅眷と推しての地小來り料  
 安小故の領主部領の郡領武彦主の肥後の菊池と同族にて數世の遠祖の時東  
 西小別せられ世の人は是を知者稀然れ菊池武俊主の昔永正六年の春の  
 時候阿蘇山の城没落の後一二の近習と從ての地小潜びてのまよ小時運竟小  
 至らざりてそれより繞小三稔の後永正八年の夏の時候那身時疫小犯さきて命

穴まぐらうのひく六西首の近習ハ胸腹研て同枕小伏したけ然當時由縁の  
 者あり彼主従の亡骸と這百緒の驛盡處る阿甦禪院小密山寺ナリハ南忠  
 主僕之墓と六言と鐫做して其墓表小ありと其墳墓今も猶彼禪院の  
 後の山小あり先生古て見ぬ紛れぬづもあらざり是より後十稔と廢て我  
 二親の兒子とせよの地小旅宿とつとも憶り多く彼秘事とぞ知ることも  
 けまへ其御先途小逢さうと悔恨めどもせぬ切々舊君終焉のあの地小  
 杖と駐りてを兒子と為小我生涯の謀と做さけれを則茲小居宅とトて  
 武藝と人小教さる身の生活小まてける今戰國の習俗と異總角牛打ッ  
 立里も武藝と嗜むる者あるとるけれの業大く仍も富小あらねと貧くも  
 あり世の倒不安るたと思ふも似て我父這地小杖と任りより五稔とい春三首の  
 時候嗜む酒小身と損れて吐血と世と去り及既小其終小臨て我佐用二郎と



枕方招たるる送言の條々異肥後在り一時同僚をける防守氏と共  
 侶の武俊主の夫人なる小芳宜の方小仕へたり。その事之首より。その地小末つ尾  
 まで絶えんとする自の下の其崖畧と説示し。且父の我身之地小住者。其  
 比より。其舊里阿蘇山なる防守筑四郎小消息し。舊君太郎武俊主の  
 之地小早逝。其ゆゑとて。彼上の実説を詳小告げやと思ひ。其地小住者。其  
 いふせえ肥後の舊里。其路二百十數里の山と海と隔絶。況乱世の不自由なる  
 脚力郵書易の便着る。非如鴻便あり。世も人も憚りぬ。一大事なる我  
 秘書と人信あり遣り。汝のありて。財用餘りあり。目もあら。故郷へ  
 赴きて彼方さると訪まると。防守夫婦小我宿念と云云と告ぐ。遮莫汝  
 の親小携られて阿蘇の山里と云ふ。比へ尚髣髴也。あり。然年閑て防守  
 叟小名古逢。其く去ぬるとも。既小送小面言。疑るるも。あら。其再會の照

据西の我身袂と分り。筑四郎が言。古歌の短冊あり。其短冊と函箇  
 載する半分の我方小藏りて。今尚茲あり。是と汝小渡を。護身書裏の  
 秘措とて。異日の用小達よ。其半分の筑四郎が必や秘藏するらん。かゝる正  
 表付契るれば。再會の折是と取也。他小見せざる疑へざる。其の餘り  
 云云と貴老の令愛。拔る童女と我を。為小結髪。の約束せ。欲る。貴  
 老の敢美引を。理りを演て推辭ゆ。その言の顛末。霜の朝小鳴く虫  
 もも。細まる聲と。励して。告示を。若半响許。其甲夜の回。呼吸絶。わ。我  
 身の不幸。是の。母親も亦。次の年。癩て。瘡の背小出。病とい  
 ち。久か。航て。空しく。四月八日。忌日を。二親共。阿甕寺。舊  
 君の墳。其。頭。我身。不肖。是。後。志。親の  
 箕裘と。承嗣て。武事。力。藝。と。人の師。小。做。敢。家。聲。と。賤。使。と。磨。の

氣と使を。後れを攪らトとの思ひ。只是血氣の惑ひる。先彼符契を見  
 せまらんと。肌膚囊と檢撈りて。彼短冊の半分と合ふと引伸し程不  
 親の身。還側せ。後をい。重く。項の拭。護身囊の括。用  
 その短冊の半分と合ふ。袂と掖。親の遞與。季彦を。受と。膝を  
 找めて。此彼両首の。短冊。合せ。見も。見ら。稀代の。付契。佐用二郎。藏  
 々の。其短冊の上。芳老。遠の。人松浦。領巾。卷り。も。二。仍。讀れ。松煙。齋。防  
 守。四郎。季彦。山。名。と。其短冊。下。の方。を。佐用。媛。都。恋。小。負。山。の。名。と。亦  
 是。二。行。の。讀。れ。是。を。合。し。吟。ま。い。遠。の。人。松浦。佐用。媛。都。恋。小。負。山。の。名。と。亦  
 よ。負。山。の。名。と。連。續。ある。各。歌。の。高。調。を。写。す。も。能。書。也。同。筆。同。紙。の  
 疑。ひ。り。け。韓。錦。の。佐用。二郎。の。又。縦。小。見。の。横。小。見。の。奇。と。奇。多。と。駭。嘆。外。小  
 詞。の。る。る。當。下。防。守。季。彦。の。短。冊。を。故。の。如。く。分。ち。て。斂。め。斂。め。ま。を。愀。然。と

貌と改め。佐用二郎。ふうち。向ひ。適ひ。韓錦。和殿の。孝義。虚。か。ね。ど。と。相。別。れ。て  
 よ。十。二。年。親。の。貽。あ。符。契。の。短。冊。料。と。相。合。る。と。ゆ。れ。か。何。と。人。を。美  
 む。似。れ。と。大。凡。人。の。命。運。の。遲。速。の。厚。薄。の。和。殿。の。養。故。世。世。の。主。君。と。宗  
 族。の。え。と。小。芳。宜。の。方。小。辭。稟。多。宅。眷。と。送。り。推。て。故。御。を。去。り。草。枕。旅。小  
 在。る。と。久。か。ら。料。ら。も。の。地。小。來。と。昔。君。太。郎。武。俊。王。の。世。在。り。と。撈。り。て  
 其。墳。墓。を。見。る。と。ゆ。れ。是。を。時。運。の。速。不。あ。ら。ず。又。兄。子。二。名。あり。而。首。の  
 則。男。兒。也。親。の。家。業。と。継。小。足。れ。其。心。筋。も。推。て。知。る。我。身。他。と。同。ト。か。ら。初  
 故。御。在。り。時。小。芳。宜。の。方。小。仕。ま。り。忠。信。節。義。の。甲。斐。る。に。ま。も。彼。君。御。命。長  
 くら。世。と。ま。り。て。幾。程。も。我。妻。音。矢。も。逝。死。し。よ。か。ら。黄。泉。の。客。ふ。る。ぬ。跡。を。送  
 る。幼。少。也。這。個。の。女。の。子。校。の。外。小。次。資。る。男。兒。を。け。れ。形。を。身。の。遣。る。方。わ。く  
 いら。主。君。の。御。隱。宅。と。宗。族。後。身。ら。ば。と。思。ひ。當。日。絶。小。七。歳。ふ。る。り。昔。見。校。を。

携りて萬里の逆路に赴けりよ。今に至りて八九年夏憂甚艱難の公を以て是年  
 今月這地に於主君の既世ふる人々の數も入りぬ。只人傳ふは家の思ひ  
 りの更餅に作りて父女法師のるりぬ。是命運の流るるを初我和殿を  
 別る時再會の符契に代てその短冊に写したる萬葉集の彼古歌の回貫佐用六とい  
 防守筑四といの迭の姓名も寓れる。深は意味ありとるりたり。今中思へば以  
 るふ似たり。何とるるべ小芳宜の方の御息死に在昔松浦佐用媛が良人大伴挾  
 彦と恋慕のあま。領巾垂りて死して石に作りたる古俗の口碑に伯仲志し。  
 然ればや彼御墓表に望夫石の二言と勸を自然不似る。況臣季彦等ら  
 艱しう雅に女兒と逆路に伴ふ辛苦の折々故妻恋しと思はぬ時を女見挾  
 むが孝順る母と慕ふて泣けり稀へ比皆是逝てかへぬ船の跡を覓て腸と  
 断なるる追慕慕哀今昔人情同一致る。抑亦奇るまやと過去來と

諄復を親の歎に小挾る。之慰難て鼻をちかされ心も俱に首脊近に入相の鐘  
 鏗々たる點燭時候ふるりけり。當下韓錦の佐用二郎の松煙齋季彦の述  
 懐とぞく回ふのく恥て拾難る。頭を擧げていける。忠る哉防守先生貴  
 老のゆひ終始錯る。苦中の苦と喫く。其志程らる。和漢古昔の精忠  
 義烈彼賢哲も恥ざる。是ふ就て朽惜く。いひぬる。我親に我身彼子  
 とく亡父の非と云々と論ぶ。死あらねども。今公道をのていぬ。其行以正か  
 ら是是を貴老に比れ。雲と壤との差別あり。益我父佐用六も舊里に在り。  
 時主君の夫人小芳宜の方と。あり捨て見えらる。介後這地に旅宿く。舊君述  
 去の實説と。つとつと。殉死もせむ。追腹斫る。彼兩國の近臣及びが。切て  
 頭を剃圓めて。彼御菩提を吊ふ。然る志ある。是より家。營て見  
 孫相續長久の計。暇る。一は為忠薄義との。當時我身の童年也。

親の由来と備不知らね、諫さるゝと憾とを非如今親の爲ふ其非と飾と説瞞  
 るとも人を欺く欺く、寧ろ天を欺くべからむ、後の世は是を知る者あり、筆を載て  
 必論は悲し、哉我身の親も及ぶ忠も孝も、前の日亡父の友、避  
 逅あきら、出處來歴実名假名と問、訂さるゝと威勢ある人の爲、其其  
 妾小と媒妁あると聴れね、怒と飽き出り、慢侮の罪、和睦の今、千言萬  
 語とので、勸解るとも、鄙語の尻放て、後死と合る、異らぬ、我身の臭氣を  
 思ひ、恥と知らざる者、とりま、知らぬ以前、いとも、今に至り、防守主、其身の孤  
 忠、少若の孝順、言詳、少知、知る上、我身の罪、最重、縦、先生佛意を、  
 我罪、戾を、饒ゆる、ゆる、我何、後の面目あり、世中、人も、交参、死、是より、  
 等の、疎と、従ふ者、ある、只、胡慮、お、做、の、と、已、る、く、と、を、り、  
 刀を、合、る、も、金、く、引、抜、死、て、肚、を、研、き、ま、て、れ、が、季、彦、敬、馬、に、推、禁、め、と、ち

何ぞぞ狂乱あり、欲先を及ぶ、放りて、詞急迫、諫れ、抜、俱、小、敬、馬、  
 ら、から、父、の後、方、引、添、ふ、り、然、れ、ば、と、佐、用、二、郎、の、止、る、べ、く、も、あ、ら、れ、思、ひ、切、る、聲、  
 震、い、て、防、守、主、林、禁、め、ある、今、我、自、殺、の、親、の、爲、不、忠、の、罪、と、贖、ふ、く、我、僻、事、の  
 遣、方、る、身、と、潔、く、せ、ん、と、思、へ、其、首、退、む、と、敦、圍、る、猛、威、止、る、べ、く、も、あ、ら、  
 と、バ、次、の、間、小、竊、聞、ある、奈、良、櫻、の、佐、之、七、と、押、繪、も、俱、小、胸、を、洗、し、と、燭、を  
 兼、り、走、り、お、そ、辱、せ、る、と、左、右、と、り、捕、着、抱、縮、め、及、ぶ、奪、取、る、と、れ、も、佐  
 用、二、郎、の、毫、も、撓、ま、さ、な、れ、八、重、作、林、禁、る、と、押、繪、も、要、る、怪、我、さ、る、と、左、と、脚、を  
 掙、し、て、寄、る、と、突、退、揮、拂、ふ、必、死、の、覚、期、八、重、作、押、繪、ハ、力、足、ら、ざ、る、あ、ら、ね  
 とも、左、右、と、り、及、ぶ、奪、難、て、只、争、あ、る、鎮、め、あ、む、せ、ん、術、を、見、よ、し、け、  
 前、卷、二、十、二、第、五、十、二、回、の、編、左、小、早、く、  
 小、程、小、大、江、杜、四、郎、成、勝、峯、張、六、郎、通、能、の、御、向、  
 田、文、の、茂、林、遠、之、地、藏、堂、詣、ん、と、一、路、人、を、醫、林、松、煙、齋、父、女、と、王、人、樵、二、郎

ら去む一霎時別を。彼佛堂へ赴りて拜す。其頭を看匝り。黄昏近くる。隨ふ  
 いそいで俱かへり來て。韓錦の庭門より杖を入りて。主人韓錦の佐用二郎を  
 松煙齋の防守筑四郎と暗譚最細や。て送小説り。説示さる。彼舊里の  
 夏小芳宜の方の。又短冊の付契の。菊池武俊の病死の。又佐用二郎の  
 父同貫佐用六の。流天曲直逸四郎季彦夫婦の。孤忠義胆の事の顛末都  
 結會話の旨取中。その驚かえんは。俱小柴の離色の陰に  
 立在て言の果ると。俟程不。彼條々と。嘆賞感激不堪む。  
 猶开儘。主人韓錦の佐用二郎の義理。迫り先非小。着て自殺せん  
 と。狂ひと松煙齋の。八重作押繪。禁れども止るべも。あらぬ。大江王  
 僕へ。難て立頭れ。母屋入。諫制る。西聲烈。韓錦王狂ひ。せ。我。方  
 僅か。來て。憶。も。彼。秘。事。と。洩。す。て。感。心。の。外。あ。ら。ず。と。議。さ。る。と。あ。れ。

みづろ血氣の勇と負と。匹夫匹婦の情。瀆れ。溢る。小。傲。ら。ず。秋。と。あ。れ。て。散。馬  
 佐用二郎の憶。巻と。緩め。通能。透さ。衝と。寄て。双。と。奪。ふ。八。重。作。の  
 遞。與。其。押。繪。の。鞋。を。拾。ふ。斂。め。て。井。が。儘。推。乃。て。走。り。奥。へ。を。退。り。け。り。然。れ。時。ハ  
 奈我四郎。這時。も。出。後。れ。て。次。の。間。お。潜。り。て。居。り。送。小。叫。び。領。り。て。裳。と。端。折。兩  
 袖。寒。け。て。冬。鯉。の。像。く。突。然。と。走。出。り。聲。高。や。う。大。事。と。知。り。大。江。峯。張。覺。悟。と。せ  
 よ。と。叫。び。も。果。む。左。右。一。齊。組。ん。と。競。ふ。と。成。勝。と。通。能。の。敬。馬。は。さ。る。言。も。喋。か。む  
 俱。小。身。と。及。一。空。と。敷。き。し。て。脚。を。飛。し。て。撲。地。と。蹴。る。修。練。一。對。白。打。の。精。妙。時。ハ  
 と。奈。我。四。郎。ハ。吐。嗟。と。一。聲。叫。び。も。あ。ま。き。身。を。轉。し。て。簷。廊。へ。仰。反。伏。し。て。平。張。け。り  
 當。下。主。僕。ハ。佐。と。睨。へ。く。噫。疎。忽。と。面。箇。の。力。士。を。我。們。料。ら。む。彼。密。話。と。洩。す  
 くと。も。交。遊。の。差。我。小。北。月。利。小。惑。ふ。豈。告。訴。者。ら。ん。や。人。を。知。ら。ず。鳥  
 詩。人。か。る。と。兩。聲。高。く。響。れ。る。佐。用。二。郎。と。八。重。作。ハ。果。れ。て。笑。ひ。忍。び。時。ハ。あ。ら

叱懲して。為主僕不勸解。成勝と通能の合咲る。坐と占て。あつたは  
 且つ安堵。今の擬勢の戯る。と久間。時八奈我四郎の身と起。頭を  
 敲。疎忽の罪を勸解。けり。是時既。日の暮。八重作の時。公。と立。一  
 夜の儲と見。て。俱。庖厨。退る程。押。繪。の。燈。引。提。あ。四下。照。り。且。主。僕。の  
 無。異。の。勢。ひ。と。舒。る。も。成。勝。と。通。能。も。押。繪。等。と。方。あ。更。八。重。二。郎。向。ひ。く  
 り。韓。錦。主。和。殿。の。一。美。の。我。們。明。日。を。預。る。べ。退。り。て。休。息。ま。あ。つ。た。と。の  
 して。佐。用。二。郎。羞。る。色。あり。膝。組。直。し。と。答。る。や。在。下。自。殺。と。欲。あ。笑。ふ。短  
 慮。小。似。れ。も。防。守。叟。の。孤。忠。と。つ。て。親。の。為。身。の。為。小。の。解。免。詞。や。然。れ  
 ども。自。殺。を。允。され。む。の。年。來。の。俠。を。捨。て。桑。門。ふ。る。え。の。と。の。と。は。疏。四。郎。推  
 禁。め。て。も。亦。血。氣。の。惑。ひ。を。和。郎。の。舊。君。武。俊。小。仕。へ。あ。つ。た。彼。君。既。不。世。と  
 去。り。あ。つ。た。孰。か。為。あ。忠。義。を。盡。さ。ん。只。世。と。共。ふ。推。移。り。て。身。を。保。つ。を。よ。そ。考。と。あ

い。の。の。美。を。思。ひ。の。り。と。と。説。れ。て。佐。用。二。郎。沈。吟。と。點。頭。を。答。る。や。諸。君。の  
 意見。感。服。す。然。る。亦。情。願。あり。我。乳。母。の。佐。用。二。郎。の。父。佐。用。六。の。俗。稱。と。取。り  
 して。さ。ら。に。あ。ら。む。む。ら。し。る。れ。も。古。昔。日。の。松。浦。佐。用。媛。と。良。人。大。伴。挾。子。彦。が。新。羅  
 征。伐。の。將。軍。と。て。水。路。を。彼。國。へ。赴。く。や。佐。用。媛。痛。く。亦。草。木。を。死。す。と。あ。つ。た  
 貞。女。之。文。字。を。異。る。れ。唯。父。子。も。庶。字。の。即。間。貫。也。佐。用。六。佐。用。二。と。喚。做。せ。も  
 忠。も。る。貞。も。る。然。る。彼。名。小。摸。擬。せ。ん。恥。と。知。ら。る。者。小。似。ら。ま。の。故。小。氏。を  
 棄。て。猶。然。も。も。韓。錦。縦。二。郎。と。い。れ。ん。と。後。安。く。あ。べ。れ。我。弟。八。重。作。も。の。意。亦  
 倣。て。間。貫。佐。之。士。の。昔。名。と。告。る。と。只。奈。良。櫻。八。重。作。と。喚。れ。ん。と。相。心。か  
 ら。の。其。甚。麻。と。談。ま。れ。の。衆。皆。好。と。稱。を。る。开。が。中。小。成。勝。へ。は。つ。や。屢。點。頭。て  
 以。わ。る。哉。主人。の。用心。在。昔。孔子。の。盜。泉。と。飲。ま。ず。曾。子。の。勝。母。の。里。へ。入。ら。ざ。と。の。故。事。を。表  
 裏。中。恥。て。貞。女。の。姓名。と。避。る。の。新。奇。と。い。ふ。下。是。小。就。也。も。防。守。叟。賢。老。ヨ

ねん 昔の精忠義胆和漢の先哲時彦と云ふもよく及ぶ者稀るべし只昔君の  
 見参の素懐空しく多しの外小少くも痛く送憾のなきかと慰められた  
 免四郎按多も俱小法然と坐小涙暗とたねり久重作時八奈我四も縁小運小  
 夕饌と佐用小椗二郎見ると現鈍する免小紛れて夕飯遅滞小及びかど  
 小物欲しく多し其味菜も甘くて食る小押給も出と給侍を  
 甘きと小衆皆相謝して儲の饌小就く程小椗二郎一重宴時と辭して  
 奥へ退りける有右夕饌果一也四箇の客の時八も小案内せらるる送代小  
 浴室へ入りて浴き程小既小初更の過ぬ一昨宵の寝不睡也主客の疲  
 勞一入れば押給の奈我四郎も小指揮して為小臥簟と儲一也各枕小就  
 たりける其詰朝免四郎季彦の早飯を果すと馳て單阿甦寺小詣り  
 昔君菊地武俊の墳墓小拜謁して香華と賻けて廻向の程思ひいと

復 懐舊の涙小堪ど這日當寺の住持を訪ふ即如く對面せらる  
 當寺の先住の素是肥後の人民多在俗の日菊池生小昔君縁あり  
 武俊阿蘇山を没落の後あつた寺小小僧居あけるも是等由縁あれど  
 然れば現住閑廂和尚即先住の徒少して尚古の老實入るりけし季彦  
 彦一話と交へると送小捨がたあり是より後も季彦の父母の地小邊  
 留の程日毎小阿甦寺へ詣ると彼身の務小あきらむる間話休題韓錦椗  
 二郎の季彦按多もと相迎へて宿所小留め一次の日此の酒肉と調理して  
 大江主僕共侶小酒盃を遣迎していよく交遊の義を固うせむ思ふ程小韓  
 錦の弟子等も早く被顛末と傳授て故人环客逗留の款小と表さるる東西と  
 贈物を言かりける丹が中も小僻めて韓錦が彼少女と取たりしとてその壽  
 祝を致さる者あり一也椗二郎も笑ひてその傳授の錯誤る我の夫と娶

してあらむ。その壽祝の要るゝと推辭て敢受されども猶生憎不賀まは  
 者日毎小間断あるとみれば憶おも日と費しく四月も下旬ふりける當下韓  
 錦樅二郎の軍肚裏小思ひを曩中我諺て郡司殿小憑れて彼少と妻小  
 媒妁せま欲ありふ。その成るべくもあらば怒小棄して出宗たる彼條の崖  
 畧の殿も夢知りてよまるる。然るに因怒地と見て和睦あるのそる。彼  
 父女と我家小留め在らまる今に至りてその故より云云と殿小告直宗に  
 我身必怒らま。只明々地小直宗はふま。と守思とあり。八重作押給  
 多大江峯張おも意衷と示きて事の利害と向ける。孰と異議まは  
 者もかく然るべしと応。然樅二郎ある決して次の日の早旦あり。梳髪と衣  
 裳と整て當郡の領主より。鏑野郡司範的の館小軍赴死て隨即拜見を  
 乞ける。侯と約半响許遂小喚入れて對面せらる。是時範的の左右ゆる

最苛め。兩箇の近習樅二郎と虎目小け。只是者のほりたる。然るに韓  
 錦樅二郎の範的の小見参して寒暖と舒無異と祝て彼一を告ま。さるふ  
 範的の言果ると侯と。勃然と聲震立て樅二郎近く杖と縁。汝の憑と甲  
 斐る。死者我日屬より汝も。懐刀子と思ひ。あて曩中の最とひ。こを  
 あもうち。彼媒妁と木女。然れども汝が力。その事成ら。まて口を  
 介る。何を。彼少女と情地小宿所小引入れて。娶りて相愛する。言語同断  
 とひ。其の風聞隠れる。我れ知ら。と思ふ。今さら何の面目あり。詰  
 来く虎威と犯さ。取る。も。檻松見ら。と。樅二郎阿容  
 た色。頭と拾けて。合る。开。御説て。火。小可何等の故。と。彼  
 少女と取。る。知ら。者の推量。と。然る風。と。做。と。あ。抑。支。の  
 着實。の。様々。初樅二郎。怒。棄。と。彼。父。女。を。逐。時。彼。等。の



又人小跟らまき。行李も盤纏も喪ひしと立合阪小露宿の。その崖界成  
 演説し。且の争う。その比彼父女と憐ふ者あり。小可と非分と。實解て和勝  
 執結さる不及び。彼等が素生と回考る小思の。けり彼少女の親。我父佐用  
 六の故友也。昔故郷不在り。時莫逆無二の。も知られ又彼少女の稚き時結  
 髪の良い人あり。相別し。より往方と知らねば。その所在と素んと。廻困ある者あり  
 有敷素小うち。措かざる。姑且我家小止宿と許して。盤纏と取らせ。その投ま  
 方小半遣らまき。思ひひの。彼等が脚意小従る。艱苦と小厭なる。素よ  
 正彼少女子小結髪の良い人あれ。その髪を稟し。上んと。推参仕りひいた。とい  
 せも果む。軌的の。呵々と冷笑と。口と横裂衣らと。と。い。る。の。あ。る。非。除  
 子貢の辯舌と。て。火を水小ひ。做まとも。孰うそれを實言と。空く。公達た。は  
 る。ら。虚。實。と。正。ま。な。れ。も。始。と。い。我。の。亦。面。止。く。も。る。た。と。な。れ。は。這。回。枉。て

鏡し。も。せ。ん。以。後。と。信。と。慎。ま。ね。と。い。ふ。件。の。面。面。の。近。習。の。共。侶。小。額。と。衝。て。今。ふ  
 不。ぬ。忠。實。仁。大。度。他。が。頭。を。續。れ。ら。る。と。脚。意。小。い。と。執。合。ま。れ。軌。的。の。然  
 も。あ。と。あ。り。め。と。領。れ。ら。樅。二。郎。小。う。ち。向。ひ。て。や。れ。韓。錦。は。い。ま。も。知。ら。る。教。他。は。あ  
 我。股。肱。也。鬼。刺。苛。三。角。築。鉞。持。隈。八。刺。高。と。喚。做。く。武。執。助。力。一。人  
 當。千。俱。小。一。方。の。旗。頭。小。做。ま。とも。要。あ。る。者。ら。と。扇。谷。殿。朝。興。小。備。れ。て。年  
 来。河。踰。の。城。小。在。り。昨。今。其。役。果。一。俱。小。あ。り。来。て。又。咱。等。小。扈。從。を。上。相  
 識。小。あ。り。ね。か。と。い。ま。苛。三。隈。八。と。其。方。小。膝。を。推。向。て。豫。多。を。韓。錦。和。郎  
 再生の御恩報ふ。一樹我小教む。と誇る。と軌的。う。ち。ゆ。て。开。一。段。興  
 の。一。の。頁。の。日。の。いと。長。なる。と。空。く。や。の。銷。ま。れ。我。等。一。覽。せ。ま。く。欲。と。



三三三

七

文藝堂藏

三三三



力其藝と著しく  
 韓錦酷く苛三  
 隈八を懲ま

三三三

文藝堂藏

三三三

三三三

況所挾這御坐席也。較劍角觥不便。猶又折也。今日允其命。他日  
 とも果む。軌的の眼を睜り聲苛立ち。とら鄙怯之和郎。又似は。他日  
 両箇に見賤く敵も不足ら。と思ふ。欲最鳥辭之と怨む。縦二郎辭まほふ  
 ようなく。あらん。是非及ぶ。何れ付られ。とら苛三。うらやま。坐席の試  
 撃の種々あり。遮莫腕推枕曳。小兒の戯ふ似たるべし。只坐角力こそあつた。け  
 とら不限八も。找と出さ。鬼薊且。終我。們的の両箇也。韓錦の身單。然るに  
 とら他一箇。二人蒐り。勝ても恥ず。年齢後。鬼薊和殿。探一掃。受咱  
 等の初司と仕ん。あの委其。其麻と啓。まれの軌的。笑々。隈八。言言。不  
 理あり。とらくせま。といそぐ。軀て席を改。苛三と縦二郎。程上。鬼處。退  
 り。送小袖を褰。身と構へ。膝と合。と組ま。當下。鐵持隈八。扇。成  
 颯と推啓。その身を斜。小隻膝立。間を隔。角觥の作法。一霎時。呼

吸と覗。やと曳。扇と共。侶小苛三。の皮より蒐りて。蚤く利を捉り。と  
 く。と縦二郎。毫も透さ。振拂。遣違。と推。推れ。疲勞。と俟。苛三。と  
 糾まる。像く。眼眩。と術。る。と縦二郎。程。と。猿臂。と伸。頂上  
 抗て。弱腰。礮と撲。惱。を力。士の剽捷。暴後。視の。毬。と弄。小異。る。ら。苛三。と吐  
 嗟。と。ら。二。間。の。ま。り。投。蜚。されて。彼。身。の。庭。の。卷。原。額。と。拓。血。と。流。して。死。活。も。知  
 ら。ざ。小。ま。う。六。俱。小。驚。く。鐵。持。隈。八。見。る。小。沼。堪。む。韓。錦。と。敷。んと。喘。る。身。と。起。ま  
 時。取。る。も。も。蚤。く。腰。刀。と。抜。ま。さ。と。縦。二。郎。の。居。る。腕。を。拵。と。臂。と。禁。めて。又。と  
 抜。せ。ま。怯。む。と。ら。と。向。腔。拂。て。小。所。を。突。飛。せ。何。の。一。霎。時。も。瀕。死。隈。八。も  
 亦。庭。面。身。を。放。下。され。苛三。小。上。伏。累。り。て。起。る。小。遣。ら。ま。春。蟲。け。り。然。る。程。は  
 範。的。の。今。這。吉。の。光。景。小。舌。と。吐。直。と。呆。れて。面。板。や。く。小。醉。る。が。像。く。只。憤。恨。胸。小  
 盈。て。の。い。づ。も。あ。ら。ま。り。と。縦。二。郎。も。あ。そ。と。思。ふ。あ。ら。ま。り。と。色。中。出。さ。ま。社。擡。合。と

恭しく輕的のりまのうらむむら御所望ごしょぼう実まこと黙止もくしかゝて酷いたく無禮ぶらいを仕つかぬ既すでに御用ごようの果  
 たれ身みの暇ひまをゆるるべし異日ひた見参けんさん仕つからぬと告別いさよ多身たみを起たて後うしろ門かどを投なげ退  
 出でけり是時このとき郡司ぐんじが家いえの若黨わかしやう小厮こしやく幾名いくに飲彼のむ居角いかく觥かうの勝負しょうぶを見んとく次の  
 間ま小こうち集つど合いて障子しょうじの唾つと穴あなと穿うち観のぞる者もの三さんより思おもふも似にど奥おく  
 醒さめ呆あま惑まどてあり怒おこれ今いま樅ぼ二郎にらうが出でても見みるといふも送おくりも甚おも他たが在あらざる  
 去時このとき衆しゆ皆みな慌あわ忙いたれ齊いっ一庭いつていの走下そうげく仆ふきし苛ご三隈さん八はちを扶起たすて勸すすめ  
 肩かた引被ひけ出でけり是これを鑑野かんや範はん的てきの韓錦かんきん樅ぼ二郎にらうの怨うらみ累かさねて遣やる方  
 もるやありけん後のち竟つひに奸計けんけいをりて彼身かのみを辜つす陥おちぬ是これ其その支しの原もとなり  
 けり畢竟いふ苛ご三隈さん八はちが韓錦かんきんの投懲なぐさまを後のちの語説ごせつ甚おもをそ又また  
 卷まきを更あらめ且かつ下回したまわ解分げぶん法ぽうを聴き録ろくか。

新局玉石童子訓卷之二十三終



